

令和6年度市民事業現場訪問(第95回市民事業専門委員会)報告書

- 1 日時 令和6年10月17日(木) 9:20~16:10
- 2 目的 卒業団体を訪問し、補助制度を活用した成果や活動継続に関する課題等を把握するとともに報告書にまとめる。
- 3 訪問先 次の2団体

団体名等	補助金実績等
特定非営利活動法人 四十八瀬川自然村 代表 小野 均 視察場所: 四十八瀬川自然村わんぱく広場(秦野市菖蒲1532先) ブルーベリー農園(秦野市三廻部3) 秦野どぶろく家(秦野市堀山下1460)	森林の保全・再生事業: H21~28、計524.6万円 間伐材の利活用促進事業: H22, 23, 25, 26, 28~30、計463.4万円 普及啓発・教育事業: H21, 23~28、計203.8万円 調査研究事業: H22, 23、計61.1万円 資機材の購入: H24, 25、計97.4万円
特定非営利活動法人 共和のもり 理事長 大野 博世 訪問会場: 共和のもりセンター(山北町皆瀬11275) 視察場所: 森林整備場所	森林の保全・再生事業(H29~31) 計28.5万円 間伐材の利活用促進事業(H29~31) 計71.4万円 資機材の購入: H29: 19.8万円

- 4 出席者 5名(増田委員長、藤井副委員長、青砥委員、石本委員、小林委員)

5 概要

【特定非営利活動法人 四十八瀬川自然村】

(1) 団体概要

- ・主に秦野市四十八瀬川流域で、里山保全及び自然環境整備を中心に、そこから派生して、環境教育やまちおこし活動をおこなっている。
- ・ホタルが自生する四十八瀬川の環境を守ろうと発足し、水源である森林の整備を続けてきた。太くなりすぎたクヌギ、コナラなどを伐採して、エンジン付きの薪割り機で割り、2カ所の窯で炭焼きをしてキャンプ場などに販売している。NPOとして農家資格を取得し、昨年から大倉登山口そばの空き家を借り「丹沢どぶろく醸造所」をオープン。生産した米を原料にしたどぶろくや梅ジュースの販売を始め、丹沢の登山者に好評。リピーターが増え始めている。

(2) 市民事業等支援制度の利用前と後で、活動にどのような変化が見られたか

ア 団体の組織体制

- ・NPOの会員数は60数人。
- ・事業は多岐にわたり拡大の傾向がある。それぞれの事業にはそれに関心があるメンバーが集まっている。しかしそれぞれの事業は独立しているのではなく、共同してイベントを行うなど、繋がりを保っている。
- ・中心メンバーは団塊世代で、組織の高齢化問題を抱えている。

イ 事業内容

- ・2つの窯で交互に伐採したクヌギ、コナラの生木2トンを詰めて400kgの炭を生産し、キャンプ場に販売するといった森林整備を精力的に行っている。加えて、昨年からほどぶろくの農家レストラン「丹沢どぶろく醸造所」をスタートさせ、登山者の人気を集め始めた。これまでの森林整備だけではおそらく接触が希薄だったと思われる登山者にアピールする地場産品を手がけ始めたことで、新たな市民に情報発信できる大きなツールを得られたと思う。
- ・農家レストランとして「農業申請」し、2023年10月に許可があり、丹沢どぶろく研究所としてスタートした。
- ・団体独自の様々な活動のうち、市民事業支援補助金の目的に合致するメニューを上手に活用し、団体全体の活動を活性化させてきた。支援補助金終了後も、森林整備を拡充させ、炭・薪の生産活動を通じて自主財源の確保に努めるなど、様々な工夫がみられる。

ウ 活動参加者

- ・活動に参加しているメンバーが生きがいを感じて楽しんでいる。
- ・会員だけでなく、地域住民や子供たち、行政も巻き込んだ地域ぐるみの活動であり、今後も広がりや継続性が期待できる。
- ・若い世代の会員増、ボランティア従事者増は課題。

エ 活動資金・収入源

- ・薪炭や農産物の販売収入に加え、新たに農家レストランも手掛けるなど、幅広い自主財源の確保に工夫がみられる。
- ・資機材には寿命があり、維持していく資金が必要。

(3) 広報や他団体等とのネットワーク

ア 活動のPRの状況

- ・ホームページを運営。
- ・口コミ、イベント活動、どぶろくの家来訪者(リピーターが多い)、小学生の体験事業等で活動の一体感を創出し、PRしている。しかし、発信の難しさも感じている。

イ 他団体・地域・行政等との連携・協働

- ・はだの市民活動協議会に加入し、秦野市や地域住民とも連携体制がとれている。
- ・地域の学校との連携により子供たちの参加促進につなげていることは大変評価できる。
- ・丹沢大山ボランティアネットワークの中核団体であったが、現状はネットワーク自体が脆弱となっており、類似団体との広域連携が難しい状況。

(4) その他

- ・森林整備作業を行う会員に対し、チェンソー安全講習を受講させるなど、安全に配慮して適切に活動を行っていることは評価できる。
- ・団体の活動を円滑に進める際に、様々な法的規制がネックになっている様子。

(5) 主な所感

- ・人を引き込むお話の上手な代表者がおられ、どぶろくの家来訪者(登山者)、里山の地権者、果樹園の持ち主、行政職員など人と人のつながり、たくさんのコミュニケーションがあって、この事業が継続されているのだなあと感心した。
- ・豊富なアイデアと先を見通す目線、先を急がずじっくり事業を展開している点など、今後も事業を継続されていくと思うし、これから新たにどんなアイデアが出てくるのか楽しみ。
- ・団体の高齢化問題は日本中共通した課題なので、あまりそこにこだわらずに、今できることを会員・従事者などみんなで楽しみながら活動されていくのが良いのではないかなと思う。

- ・ 市民事業支援補助金で購入した資機材が更新時期を迎えている。水源施策の目的に合致する活発な活動を継続できる団体については、資機材の補助メニューの拡充や補助の期間を延長するなど、対応を検討する視点も必要ではないでしょうか。



▲森林整備の現場視察



▲手作り炭焼窯の現場視察



▲ブルーベリー農園の現場視察



▲どぶろく家で意見交換

【特定非営利活動法人 共和のもり】

(1) 団体概要

- ・森林の保全・再生・活用を目指し、森林の里、農林業の里、生涯学習の里づくりの活動を通じて、地域の活性化に寄与することを目的としている。
- ・森林づくりでは、災害に強い森づくり、野生動物が生息できる森づくり、薪炭生産など経済林づくり、を目標として取り組んでいる。

(2) 市民事業等支援制度の利用前と後で、活動にどのような変化が見られたか

ア 団体の組織体制

- ・会員数 29 人。平均年齢 72～73 歳。
- ・代表者の強いリーダーシップのもと、廃校後の小学校を拠点事務所とし、若い世代も一緒に巻き込みながら運営。
- ・若い世代の人が、移住して徐々に活動の広がりが見られる。

イ 事業内容

- ・市民事業支援補助金の終了後も、森林づくりに加え、川崎市との上下流交流事業、小学生を対象にした出前事業や体験学習、農産物販売、地域外の方々との様々なイベント開催など、活発な活動を展開している。
- ・森林づくりでは、クヌギ、コナラなど実のなる広葉樹植栽を 1ha/年ずつ 10 年間継続している。
- ・都市（川崎市）と水源地住民との交流事業も 12 年間継続中。

ウ 活動参加者

- ・移住者促進事業を町ぐるみ、行政と一緒に展開。移住者は確実に増えている。また、川崎市の体験交流事業で年間 40 名程度の参加者有り。
- ・町内の総合的な組織づくりとして、福祉関連の集まりにも積極的に参加、合同組織として活動する中で後継者育成、まちづくりの提案・企画立案もしている。

エ 活動資金・収入源

- ・都市公園の維持管理業務を指定管理事業として受託し、安定的な財源確保を図っている。

(3) 広報や他団体等とのネットワーク

ア 活動のPRの状況

- ・ホームページでの発信。
- ・拠点の共和の森センターは登山者が通る道に接していることから、展示とパンフレット配布を行っている。
- ・県立山北つぶらの公園まつりで、NPO のコーナーを設けての情報発信・アピール。
- ・チェーンソーアート大会、大野山フェスティバルなどのイベントで他団体と交流。

イ 他団体・地域・行政等との連携・協働

- ・奈良県の林業家との交流があり、吉野から訪れてくれる。また、山がきっかけで、毎年 1 人～2 人林業に携わる人が増えてきた。

(4) その他

- ・市民事業支援補助金の効果が見受けられる。
- ・共和地区には 330 ㌔の広大な財産区の山があり、同地区の住民が財産区のメンバーとなっている。財産区には、東京電力の高圧線の線下補償として 3 年に 1 回、約 7 千万円の収入がある。NPO そのものの活動ではないが、この収入を活用して、地域住民が主体となり、公共施設や金融機関、病院などへ行くための、住民が運転する福祉バスを運行し、住民の足となっている。水源環境税の補助団体は数多くあるが、地域住民と

一体となった NPO が地域の維持・活性化の大きな支え手となっている、他には例が少ないケースといえそうだ。

(5) 主な所感

- ・地域にある森林等を良くしようと思う気持ちが伝わってくる。法人化するのに苦労したそうだが、地域振興に繋がったとのことで、市民事業支援が活かされていることを実感した。
- ・地域おこし、まちづくりに熱心に情熱を注いでいる代表者のまわりに、それに賛同する支援者や会員が集っている。今後いつまで東電の財産区補助金制度が継続されていくのかは不明ではあるが、広域にわたる共和地域の村おこし、保全活動に有効活用されていると感じた。また、災害に強い森林づくりは環境保全事業だけではなく、高齢者支援・福祉事業（福祉タクシーの企画発案）を含んだ総合的な「まちづくり」につながる事業になっている様子につくづく感心した。
- ・過去に補助を受けた団体の成功例として、現在活動している団体に学んでもらいたいことが多くあった。そのような場作りも私たちの役割の一つではないかと思った。



▲森林整備の現場視察



▲café くすの木の紹介



▲共和のもりセンターの紹介



▲共和のもりセンターで概要説明・意見交換

以 上